

書評

現代世界における宗教，そして政治 ——Charles Taylor, *A Secular Age* を読む

高田 宏 史

二〇〇七年にチャールズ・テイラーの名著、『世俗の時代』(*A Secular Age*) が出版されてから、およそ五年の月日が流れた。同書によって、テイラーは二〇〇七年のテンプレート賞を受賞し、翌年には京都賞も受賞した。また、『*Political Theory*』をはじめとするさまざまな学術誌で書評が掲載されたほか¹⁾、二〇一〇年にはロバート・ベラー、ウイリアム・コノリー、ホセ・カサノヴァ、サバ・マハムードら、さまざまな論者による『世俗の時代』評にテイラー自身の応答を付した *Varieties of Secularism in a Secular Age* が出版されている。本邦でも、『世俗の時代』についてはさまざまな書評・論考が存在しており、同書の議論についての紹介は十分に進んでいると思われる²⁾。本稿ではこ

うした事情をふまえ、『世俗の時代』出版以降、同書についてどのような批判がなされてきたのか、そしてそれを踏まえたうえで同書にはいかなる意義があるのかを簡単に検討したい。

1. 『世俗の時代』はどのような本か

一九九〇年代後半以降、テイラーは宗教(カトリシズム)、あるいはそれに付随する世俗化に関する議論を大々的に展開するようになっていく。書籍化されたものだけを挙げても、カトリック信徒に向けて価値多元主義とカトリシズムの親和性を説く『カトリック的近代性とは?』(*A Catholic Modernity?*) や、ウイリアム・ジェームズの『宗教的経験の諸相』を手がかりに現代の宗教が置かれている状況を論じた『今日の宗教の諸相』(*Varieties of Religion Today*)、そして近代の社会的想像を論じつつ西洋近代の世俗化について概観した『近代の社会的想像』(*Modern Social Imaginaries*, 邦題は『近代』) など、すべて宗教ないしは世俗化にかかわる主題を取り扱っている。テイラー研究の第一人者ルース・アビーは、これを宗教的転回(religious turn)と呼んだ³⁾。『世俗の時代』は、この「転回」の到達点なのである。

『世俗の時代』の主たる目的は、西欧におけ

1) HURD, Elizabeth Shakman, "Books in Review: *A Secular Age* by Charles Taylor," *Political Theory*, 36(3), 2008, p.486; CALHOUN, Craig, "A *Secular Age*," *European Journal of Sociology*, 49(3), 2008, pp. 455-461; LARMORE, Charles, "How Much Can We Stand?," *New Republic*, April 9, 2008, pp.39-44; COOKE, Bill, "Charles Taylor and the Return of Theology-as-History," *Intellectual History Review*, 19(1), pp. 133-139; ROBERTS, Vaughan S., "A *Secular Age* by Charles Taylor," *Implicit Religion*, 12(1), p. 121 など。

2) 辻康夫「西洋における宗教生活のゆくえ——チャールズ・テイラー著『世俗の時代』をめぐって——」、『北大法学論集』第60巻2号、2009年、(402) 740- (381) 719頁；小田川大典「充実の変容と危機——チャールズ・テイラーの世俗化論」、荒木勝・下定雅弘・山口和子編『東北アジアの幸福観』岡山大学出版会、2011年、95-109頁など。『世俗の時代』を中心としたテイラーの研究書としては、拙著『世俗と宗教のあいだ——チャールズ・テイラーの政治理論』風行社、2011年がある。

3) ABBEY, Ruth, "Turning or Spinning? Charles Taylor's Catholicism: A Reply to Ian Fraser," *Contemporary Political Theory*, vol. 5, 2006, pp.163-175を参照。もっともテイラーの九〇年代以降の議論の展開を「転回」と称することには疑問がある。学究の道に入ったときから、テイラーの関心の中心にはつねに「宗教」の問題があったことは確かだからである。前掲拙著第3章を参照。

る世俗化の歴史を「信仰の条件の変容」という観点から再構成し、そのうえで現代の世俗的社会がどのような「信仰の条件」を有しているのかを明らかにすることである。したがって同書は、大まかに言って二つの部分から成立することになる。第一の部分は、第一部から第四部までの「歴史的」部分である。そこでテイラーは、西欧社会の「世俗化」の歴史が単線的でも必然的でもない、偶然的で複層的な過程であることを詳論している。そして第二の部分は、第五部の「道徳現象学的」部分であり、そこでは現代西欧社会において「内在的枠組み」という信仰の条件のなかで、内在性を超越性に開かれたものであると考える立場と、完全に閉じたものとして自足しようと考える立場が相互に断片化しつつ抗争しあっているとされている。それゆえテイラーによるならば、現代社会においてはある特定の「宗教」が絶対的かつ全面的な勝利をおさめることもなければ、宗教のみならず一切の霊性を認めない「排他的人間主義」(exclusive humanism)が勝利することもないのである。

2. 『世俗の時代』の評価

『世俗の時代』は斯界に大きな衝撃をもって迎えられた。先にも述べたように、同書は数多くの書評や論文にとりあげられただけでなく、新しい議論を触発する媒体にもなっている⁴⁾。だがもちろん、同書に寄せられた反応は必ずしも肯定的なものばかりとはいえない。よくある批判のひとつめは、それが「混乱した歴史書」であるとする批判である。これは主として第四部までの議論に関して向けられる批判なのだが、テイラーの論述自体が整理されておらず多分に重複を含んでいることや、各部の議論のつなが

4) 一例を挙げるならば、DREYFUS, Hubert & KELLY, Sean Dorrance, *All Things Shining: Reading the Western Classics to Find Meaning in a Secular Age*, Free Press, 2011を参照。ドレイファスとケリーは、テイラーの議論に触発されつつ、西洋の精神史の大胆な読み替えを行っている。

りを担保する論理が不明確なこと、そして、取り上げられた個々の歴史事象に関する認識の誤りや解釈の間違いなどを指摘するものなどである⁵⁾。よくある批判のふたつめは、結局同書はカトリックの護教論にほかならず、カトリックの学者がカトリックの聴衆に向けて語った説法に過ぎないのではないか、という批判である⁶⁾。これは主として第五部の議論に関しての批判であるが、批判とまではいかなくとも『世俗の時代』をはじめとするテイラーの宗教論・世俗論が無神論にたいしてどのような含意をもつのか、という点に関しては数多くの議論が存在している⁷⁾。

また、これら二つの批判のほかにも強力な批判が、『世俗の時代』には向けられている。カサノヴァは、テイラーが自らの議論を「北大西洋世界」(North Atlantic World)に限定していることに疑問を呈している⁸⁾。テイラーは、「北大西洋世界」の知的・精神的自律性を無条件的に想定しており、近隣地域やとりわけ「植民地」との相互影響関係については語っていない。しかし、植民地への影響ならびに植民地からの影響を考慮することなしに、西欧近代の世俗化

5) たとえば、前述した Larmore の書評や、*Varieties of Secularism* に収録されている Wendy Brown や Jon Butler の論文などが、テイラーの歴史叙述に対して批判的なスタンスを示している。

6) 典型的には Larmore の批判がそれにあたる。また、肯定的なニュアンスではあるが、*Varieties of Secularism* に収録されている John Milbank の論文も、テイラーの議論が一種のカトリック護教論として組み立てられているという点に関しては同様の認識である。

7) テイラーのカトリシズムには無神論への敵意が存在していると指摘する FRASER, Ian, *Dialectics of the Self: Transcending Charles Taylor*, Imprint Academic, 2007 だけでなく、*Varieties of Secularism* においても Simon During や William E. Connolly などがこの論点を検討している。

8) CASANOVA, José, "A Secular Age: Dawn or Twilight," in WARNER, Michael, VANANTWERPEN, Jonathan, CALHOUN, Craig, *Varieties of Secularism in a Secular Age*, Harvard University Press, 2010, pp. 265-281.

を論じることはできるのだろうか——このようにカサノヴァは問うているわけである。さらに、テイラーの議論が北大西洋世界に限定されていることは、「植民地主義」の問題とともに、別の批判を引き起こしている。タラル・アサドは、テイラーの世俗論が「宗教」なる概念をいささか無批判に「信仰」と同一視していることを批判している⁹⁾。テイラーの議論は、北大西洋世界に限定されたものであり、それゆえ彼が標準的な宗教の範例と考えているのは「キリスト教」である。こうしたことからテイラーは、現代の宗教的状况を論じるときにも——もはや西欧には膨大な数の非キリスト教的な「宗教」に属する人びとが多くいるにもかかわらず——、キリスト教をモデルとして諸宗教の混交する現代社会を論じてしまうのである。

3. 世俗主義を論じる——『世俗の時代』以降のチャールズ・テイラー

『世俗の時代』以降のテイラーの議論の展開は、基本的にはこれまでの議論の延長であり、その意味では上述したような諸批判に正面から答えたものであるとは言い難い。しかしながら、『世俗の時代』以降のテイラーの議論には、同書では十分に論じられなかった問題が前景化している。いふなればそれは、政治と宗教をめぐる問題であり、世俗主義の問題である。

テイラーは二〇〇九年に、ユルゲン・ハーバーマース、ジュディス・バトラー、コーネル・ウェストラと「公共空間における宗教の

力」と題するシンポジウムを行っている¹⁰⁾。そこでテイラーは、単なる「寛容」ではなく、また「政教分離」という手段に訴えることなく、宗教的多元性をリベラル・デモクラシーにおいて擁護しうる原理として世俗主義を再編すべきであると主張している。注目すべきは、こうした議論が「制度」の方向へと向かうことなく、あくまで「倫理」の領域における問題として提示されていることである（実際テイラーは、討論においてハーバーマースの制度志向を痛烈に批判している）。制度化には、必ず規範を絶対化し、そこから逸脱する存在者を排除するコード・フェティシズムへの墮落の可能性が付き纏う。こうした認識を背景として、テイラーは、こと宗教多元性の擁護の擁護という点に関しては、世俗主義は倫理のレベルに留まるべきであると考えているようにみえる。

現在、政治と宗教の関係について、さまざまな論者がさまざまな角度から議論を行っている。テイラーは、こうした論争においてつねに中核的な位置を占めつづけてきた。また、上述したように、テイラーの議論には一定の強力な限界もある——植民地の問題やキリスト教的「信仰」のモデル化など。しかし、こうした限界を踏まえてなお、否むしろ、こうした限界のゆえにこそ、テイラーの世俗主義論には大きな魅力が存在している。現在のところ、私たちは、リベラル・デモクラシーを所与として生きていくほかない。テイラーの議論は、「北大西洋世界」から伝播したリベラル・デモクラシーに徹底して寄り添っているからこそ、重要なのである。

9) タラル・アサド、菊田真司訳「世俗主義を超えて」、磯前順一・山本達也編『宗教概念の彼方へ』、法蔵館、2011年、373-404頁。

10) MENDIETA, Eduardo, VANANTWERPEN, Jonathan (eds.), *The Power of Religion in the Public Sphere*, Columbia University Press, 2011として、のちに書籍化されている。